エチオピアにて
コーヒービジネスの依頼

私の誕生日、
NPO 高麗のエチオピア代表となったマホメット氏より、
コー ヒービジネスの話がありました。

２００１年５月エチオピアコンサートに向け、エチオピア各地を撮影する旅に出ました。その旅の途中で、私は誕生日を迎え一緒に行った仲間が祝って下さいました。その日、当時エチオピア大使の親友であり、NPO 高麗のエチオピア代表となったマホメット氏より、コー ヒービジネスの話がありました。エチオピアは人類発祥の地とも言われていますが、コーヒー発祥の地とも言われています。一番の生産物でありな がら、農民は貧困を強いられているのです。マホメット氏は、海外の大手商社が捨てる様なくず豆をただ同然に持って行き、加工しているコーヒー をコーヒーとし出しているので、本当に良い豆はなかなか海外に出ていかないと言うのです。そして搾取があるのでエチオピアの農民は豊かにな れないと訴えてくるのです。おいしい良い豆をそのまま日本に伝えて欲しいと依頼されました。私は望むところですと、思わず答えていました。
エチオピアはこの年世界最貧国と言われていました。が、大地は肥沃で農産物は豊かです。何故貧困なのかと疑問が湧いてしまうことがあまり に多いのです。社会の仕組みの改善なくして、エチオピアの飢餓も貧困も解決しないという話が身にしみてわかることの連続です。初めてエチオピ アでコーヒーセレモニーを見て、コーヒーを飲みました。旅の疲れがとれ、体の中がさわやかになり、一遍に元気を取り戻しました。味はコーヒーと は思えませんでした。これがコーヒーであれば、今まで飲んできたものはコーヒーではないと感じ、別の飲み物と思いましたが、このコーヒーを多くの人に飲んで頂きたいと願いました。又、私は、忘れもしない十才の頃、テレビのニュースでアフリカでは飢餓で亡くなる人々、子供達が大勢いるこ とを知り、大変驚きショックを受けたのです。同じ時代に生まれ、日本では食べる物に不自由がなく生活しているのに、同じ地球上に食べる物がな く亡くなっている人がいる事実を受け止める事が大変でした。何か出来ないものかと子供ながら必死で考えました。が、お金もない、力もない子供 である私が何も考えつかないのです。せめて飢餓の状態を分かち合うことしか出来ないと考え、食べることをやめました。衰弱していく私の様子に 母がたまりかね、「恵子が食べなくても、あの子達は助からない。食べなければダメよ」と言ったのです。泣きながら食べ始めたものの、私は、子供 の頃より食べる事に罪悪感を持っていました。斎藤さんにお会いし間もない頃、嫌々食べている私の姿を見て、注意されたことがあります。その事 をきっかけとし、私は食べる事に罪悪感を覚えなくなり、普通に食べれるようになりました。